

日本ソーシャルワーク学会 第35回大会

チームワークを推進するケースカンファレンス

—AAA多機関ケースカンファレンス・シートの効用—

2018年7月22日

○副田あけみ(関東学院大学) 長沼葉月(首都大学東京)
松本葉子(田園調布学園大学) 土屋典子(立正大学)



1. 研究目的・視点

□ 目的

- ・「AAA多機関ケースカンファレンス・シート」活用のケースカンファレンスが、チームのタスクワークとチームワークの推進に寄与するかどうかを検証

□ 視点

- ・高齢者虐待事例を初めとする「複合問題事例」（「支援困難事例」）への介入・支援には、多機関・多職種によるチームアプローチが必要
- ・チームアプローチの一つの方法がケースカンファレンス



・ケースカンファレンスの基本的目的： 支援方針や支援プランの作成

・その他の目的：「多機関・多職種ネットワーク形成・発展」「地域課題の抽出」「事例提供者を含む参加者の学び・実践力向上」(久保他2010、野中2012、岩間2016)

・間接的効果：「参加者間の相互関係の深化による当事者意識や参加意欲の発達、情緒的な相互支援」(野中2012)



@参加者の相互理解や関係性の深化、それを通じた相互信頼や相互支援といったチームワークの推進を、ケースカンファレンスの主たる目的として捉えることは、これまでなし



@虐待事例や家族関係が絡む「複合問題事例」のケースカンファレンスでは機関間・職種間で状況認識・背景理解、支援方針・支援プラン案に違い

虐待や多問題という事態、当事者の消極的・拒否的態度等



支援者間に否定的感情(不安・緊張感・対処困難感・回避感情等)



認識・意見の違いの受け入れ困難。建設的な意見交換・意見調整困難



相互不信感や感情的対立等から**チームアプローチが困難**： 特定の機関・職種に支援の押し付け、柔軟な役割分担困難、情報共有・連携が困難



・こうした事態の回避方法: チームワーク形成・発展を目的の一つに置いた
ケースカンファレンスの実施

緊張感や不安、対処困難感等の否定的感情の緩和 ⇒

異なる相互の認識・意見等の理解 ⇒

相互信頼・相互支援という（狭義の）チームワークの誕生 ⇒

支援方針・支援プランの作成・実施というタスクワークを推進 ⇒

タスクワークの進展 ⇒

（狭義の）チームワークを醸成 ⇒

成長するチームワーク ⇒

チームとしてのタスクワークがさらに進展

効果的な（広義の）チームワークを生むケースカンファレンス



・効果的チームワークを醸成するためのツール開発:

解決志向アプローチ、サインズオブセーフティ・アプローチ、リフレクティング・プロセス、アンティシペーション・ダイアローグの発想を援用した**AAA多機関ケースカンファレンス・シート**

・本シート(配布資料1)の特徴

- ① ストレングス探しを先行させる、複眼的視点(危害リスク確認・安全探し)によるアセスメント
- ② 事例理解より支援者の対応に焦点。複眼的視点から振り返り
- ③ 参加者間の対話を重視(内なる対話)
- ④ 近い未来に対する希望と不安の共有

2. 研究の方法と倫理的配慮

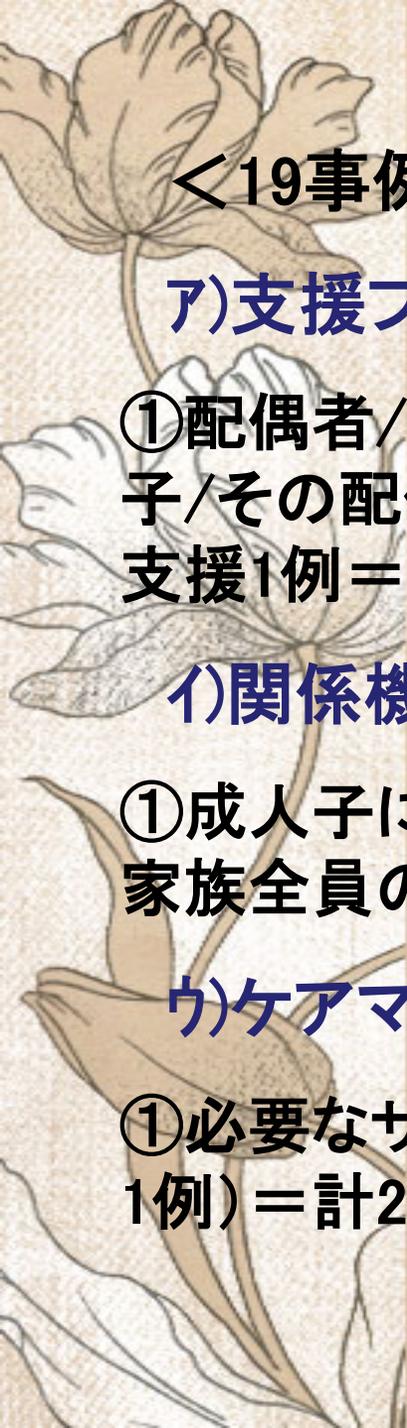
□ 調査法

- ・半構造化法による電話インタビュー、質問紙調査（インタビュー・ガイドラインに沿った質問項目）

□ 調査協力者

- ・AAAシート活用のケースカンファレンス実施者：ファシリテーター（11名）・参加者（31名）。シート活用のケースカンファレンス事例実数は19事例：

- ・電話インタビュー対象者（延べ29名）、質問紙調査回答者（延べ15名）⇒分析対象数44：所属機関は地域包括支援センター、行政機関、居宅介護支援事業所、介護サービス事業所、障害者サービス事業所、その他多数。職種はソーシャルワーカー、ケースワーカー、ケアマネジャー、サービス提供責任者等。経験年数は1年から15年以上。ファシリテーターは経験年数のある地域包括支援センター社会福祉士がもっとも多かった。



＜19事例のケースカンファレンス目的＞

ア)支援プランニング・モニタリング・家族再統合等の検討

①配偶者/きょうだいによる身体的暴力5例、②成人子によるネグレクト2事例、③成人子/その配偶者による身体的暴力4例、④障害者虐待1例、⑤障害者の生活環境への支援1例＝計13例

イ)関係機関間の情報共有、認識のズレ・膠着関係の打開

①成人子による身体的暴力1例、②認知症単身高齢者への支援1例、③高齢者を含む家族全員の生活支援1例、④子どもネグレクト事例1例＝計4例

ウ)ケアマネジャー支援

①必要なサービス提供が困難な高齢夫婦世帯への支援1例、②死亡事例の振り返り1例)＝計2例

□ 調査期間：調査実施：2016年11月～2018年3月末

□ 分析法：インタビューデータの逐語録・メモ、質問紙調査の自由記述部分のデータをオープンコード化

・インタビューガイドの質問項目：「本シートを活用した感想」、「本シートを活用することで満足した点」、「本シート活用で印象に残った点」、「本シート活用でケース対応はうまくいきそうか」、「本シート活用のケースカンファレンスで参加者間のコミュニケーションや協働で変化はあったか/ありそうか」等

これらを尋ねた回答に焦点を当て、本シート活用のメリット、意義、成果、効果といった意味合いで語られている内容で類似のものをコード化

・類似コードをさらにカテゴリーにまとめ、共同研究者らとの協議を通して整理

□ 倫理的配慮：所属大学の研究倫理審査委員会の承認。調査実施の際には事前にインタビュー・ガイドを送付、了解を得た方にインタビュー。カンファレンス対象事例については、類型、カンファレンスの目的がわかる程度の質問のみ

3. 分析結果

□ 分析結果：配布資料2(表1)

- ・ストレングス視点に関する内容から：12のコードと4つのカテゴリー
- ・構造化された様式に関する内容から：11のコードと6つのカテゴリー
- ・安全像・スケーリングに関する内容から：8のコードと4つのカテゴリー
- ・実現可能なプラン案に関する内容から：8のコードと3つのカテゴリー
- ・ケースカンファレンスによる多機関協働の内容から：4つのコードと2つのカテゴリー が生成された。
- ・これらのカテゴリーは、さらに、A【肯定的感情とチーム意識の生成】、B【参加者全員の発言と相互理解の促進】、C【支援プランの円滑な検討と納得のいく決定】の3つの上位カテゴリーにまとめることができた。

4. まとめと考察

□ ①ストレングス視点による情報整理、②安全像の構築・安全度評価、③実施可能なプラン案の検討、④構造化された様式、⑤ファシリテーションの枠組み、という特徴をもつ本シートを活用したケースカンファレンスは、

(1)狭義のチームワーク:A【肯定的感情とチーム意識の生成】およびB【参加者全員の発言と相互理解の促進】を推進するとともに、(2)タスクワーク:C【支援プランの円滑な検討と納得のいく決定】を推進していくことが明らかとなった。

・コミュニティ心理学の視点から(米山.2016)

・支援を求めない家庭への対応⇒クライアントや状況への怒り・失望、他機関への憤り、疲労からの無力感＝勇気をくじかれた状態

・関係機関のケースカンファレンス⇒困難感の共有、専門性・役割の相互理解、支援の意味等の共有⇒子どもと家庭を支援するコミュニティ(ネットワーク)の信頼感・貢献感・所属感、共同体感覚の向上(＝本調査のA)

・関係機関のケースカンファレンス⇒コミュニティの対応力の向上＝支援の視点や連携のありかたの理解、機関の役割に自覚的に(＝本調査のC)

・米山はこうした効果をもたらすケースカンファレンスの方法は明記せず

・私たちの結果:A【肯定的感情とチーム意識の生成】と、C【支援プランの円滑な検討と納得のいく決定】の推進だけでなく、米山が触れていなかったB【参加者全員の発言と相互理解の促進】についても推進することを確認。これがCにもたらす影響は大きいと考えられる。

5. 課題

- 分析事例数を増やす(多様な複合問題事例に応用)。
調査は現在も継続中。新たなコードやカテゴリーの誕生の可能性あり
- 調査では、本シートやファシリテーションガイドの微修正を求める意見もあり。その検討が必要。
- 本シート活用によるケースカンファレンス実施者の把握が困難で、調査協力者が得にくい。
- 本シート活用の拡大・浸透を図る方法の検討。

@参考文献

米山祐子(2016)「子ども家庭支援センターにおける連携と協働—その連携のありかたとケースカンファレンス」
箕口雅博編『コミュニティ・アプローチの実践』遠見書房。その他については、学会抄録を参照のこと。